

災害記憶の維持・喚起に関する新聞報道の変化

——「風化」の用法を手がかりとして（2014）

Changes in newspaper reports of maintenance and evocation of Disaster Memory

--Focusing on the usage of "Fuka<Weathering>"(2014)

◎王 輯予

Jiyu WANG

関西大学社会学研究科マス・コミュニケーション専攻 Mass Communication Major, Graduate School of
Sociology of KANSAI UNIVERSITY

要旨・・・本研究は、「風化」という言葉の用法の変化を手がかりとして、①90年代以前の報道機関の災害へのまなざし、②90年代以降から現在までメディアにおける防災意識の変化、という二点を明らかにする。その分析を踏まえ、災害記憶の維持・喚起というメディアの役割を考察する。

キーワード 災害文化 風化 新聞報道

一、研究の経緯

「風化」という言葉は現在の日本では、中国と異なる意味を持っている。それに加え、「風化」の意味が、なぜ半世紀の間に、大きく変化しているのか、まずは中国からの留学生としての疑問であった。

近年の新聞記事を検索すれば、「風化させない」を使用する記事が多く登場し、特に自然災害（地震、水害など）、人為災害（戦争、事件事故）に集中している。例えば、朝日新聞における2014年1-6月の約400件の記事の中で、「風化」という語は震災、戦争、事件事故、地理・気象などという順序で登場する。これらの記事の文脈から判断すれば、災害・事故などに関する記憶（過去の体験により保持していた情報）が薄れないよう、あるいは忘れないようにというメッセージとして「風化」が使用されている。

元々災害に関するメディアの機能として「報道機能」と「防災機能」が求められるとされる。新聞報道における「風化」の意味の変化、そして近年の災害報道における頻繁な使用は、後者の「防災機能」を構成する新たな要素とかがかわって使用されているのではないか。つまり、「災害文化」²として、災害の記憶・体験の地域住民や日本人による共有、伝承という要素ではないだろうか。この役割を検証するため、60年にわたる新聞記事における「風化」という用語の変遷を整理することで、マス・メディアの災害記憶の維持・喚起という機能について考察したい。

二、研究の方法

「風化」という言葉は、近年の新聞記事において、「災害・事故などに関する記憶が薄れないよう、忘れないよう」という文脈の下で使用される。しかし、1970年代の「原爆体験を風化させな」という述べ方の出現以前は、「風化作用」という物理・化学的な意味と、「徳などの品格要素によって人を教化する」という意味で表現されていた。

「風化」の意味転用と新聞報道の変化を明らかにするため、朝日新聞と読売新聞の全国版（文献・情報検索のデータベース）を対象に、以下の項目について検討を行った。

- ① 「風化」の語義の時間的変化
- ② 「風化」の語彙の使用法からみる新聞報道の変化
 - ・「風化」という言葉の意味転用の年代区分
 - ・記事数の時間的変化
 - ・記事内容の言語環境の変化
 - ・社説からみる編集方針の変化

三、内容分析（以下使用グラフ及び添付資料はすべて資料による筆者作成）

（1）辞書における語義・解釈の変化について（各辞書の解釈を省略、典型例で説明）

1925年出版の『広辞林』（第一版）から1983年第六版まで、「風化」は「上の者の徳に下の者が感化されること」と「i 岩石などが空気・炭酸ガスなどのため変質分化する現象；ii 含水結晶が空中で水分を失い砕けて粉末状の物質に変わる現象」という二つの意味が掲載されている。

1983年の『広辞苑』（第三版）において、「地表及びその近くの岩石が、空気などの物理・化学的作用で次第に崩されること。比喩的にも用いる。＜戦争体験の風化＞」という用法が初めて登場する。

つまり、「風化」という言葉の意味転用は1920-1980年代までの約60年間に起きたことが推定される。

（2）新聞における用法の変化

① 平成以前の「風化」の用法

「風化」という言葉の使用は、平成（1989年）以前は1970年を限界に二段階に分けられる。1970年以前に「風化」は物理的・化学的な現象として多く使用され、「上の者の徳に下の者が感化されること」という意味では、1908年の記事を最後に登場しない。それ以前でも、政府の啓蒙文書及び社説に見られるが、口語としては多用されていない（記事例：朝日-1897年3月13日「雑報 台湾統治法の改革：漸次同島民をして文明的風化に浸漸せしめん方針なりと言ふ」）。1970年以降、「風化」は比喩的に、ある物事が人の視野から薄れ、消えてしまう意味で多用されている。この中で、戦争の記憶・体験が薄れるという現象に対して、「風化する」「風化させるな」という用法が終戦25年の1970年から次第に多くなり、例えば「被爆体験 風化させるな」という転義された用法が登場する（記事例：読売-1977年8月15日「終戦記念日に考えること：この戦争体験も、年を経るに従って風化するばかりではなく、戦争を体験しなかった人たちが国民の半分以上を占めるようになった」）。しかも、「戦争記憶」と「被爆体験」だけではなく、「水俣病」「ロッキード事件」などの人為的事件・事故に関する記事にも広範に使用されるようになった（記事例：朝日-1988年8月1日「あの悲しみ風化させない 日航機事故の遺族が記念碑：記念碑建設の発起人代表で、夫を亡くした兵庫県西宮市甲陽園、石井潤子さんは「事故を風化させてはならないんです」と語っていた」）。戦争の体験及び他の事件・事故から教訓を吸収し、その経験を継承・保存する意識を表現するために、「風化」が用いられるようになった。（グラフ1）

グラフ1：平成以前-「風化」をキーワードとして検索した記事数（-1989.1.6）

内容分類	徳の強化作用		物理化学の風化		戦争体験の風化		人為事件事故		風化の比喩意味		その他	
	朝日	読売	朝日	読売	朝日	読売	朝日	読売	朝日	読売	朝日	読売
1900以前	2	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	4

1900-1969	5	2	6	5	0	2	0	0	0	1	6	7
1970-1979	0	0	3	7	11	21	1	3	8	11	0	10
1980以降	0	0	1	5	9	17	7	14	20	26	5	5
総計	7	2	15	17	20	40	8	17	28	38	11	26

一方、1970-1990年代の20年間、自然災害に関する記事には、「風化」は使用されていない。自然災害に関する記事は、概ね当該の災害に関する情報伝達と防災・減災の面から報道されており、1990年代以前は記憶の継承という意識は強くなかったと推測できる³。

② 自然災害に関わる「風化」の登場

● 阪神淡路大震災の前後

伊勢湾台風30周年（1989年）の際、地元の催しに関する朝日新聞の記事において、「風化」が30年を経た自然災害の記憶の「劣化」を意味するものとして初めて使用された⁴。80年代の記事では例外的な使用方法である。読売新聞も朝日と同様、1995年以前は災害に関する「風化」の記事も5本のみである。本報告は主に朝日新聞の分析を例として説明する。

阪神・淡路大震災以降の記事においては、自然災害を表現する用法が多くなる。1989年から2014年までの記事検索によれば、「風化」を使った自然災害に関する記事は朝日新聞の約240件の記事に約160件、読売新聞の約380件の記事に約280件がある。朝日新聞が最初に「風化」を使用した記事は、震災体験を風化させないため、地震テーマパークを建設、地震震などを研究する『前兆博物館』という提案である。さらに、「防災や都市づくりに必要なことは、行政や住民、専門家様々人が、合意作りに努力し、対策や計画作りに汗を流す姿勢である。震災を風化させないことが災害共同体の現代都市に住む私たちの責務である」という記事もある。⁵

阪神淡路大震災以降、震災に集中しているだけではなく、他の災害も「風化しつつある」または「風化させたくない」という論調で言及される回数も次第に増え、災害発生の歴史と災害体験という内容も増加する。つまり、「風化」を使用した記事の報道内容は多様化する。阪神淡路大震災を契機として、「風化するな」「風化させたくない」という報道側は阪神淡路大震災に限らず、他の災害でも喚起され、未体験者に防災の知識及び行動指針として語り継ぎたい、という意図が見受けられる。以上、90年代のマス・メディアは歴史上の災害に言及することによって、地震及び津波の仕組みと防災知識などの普及を報道の中心においた。

● 東日本大震災（2011年）以降

まず、「風化させない」という語は、阪神・淡路震災以降、東日本大震災までと比較して、震災後、三年を経た段階で多用されており、災害に関する記憶が「風化」する前に、それを「抗う」意志を新聞報道が表現している。（グラフ2）

グラフ2については、阪神淡路大震災と東日本大震災の二回の災害の間に「風化させない」という表現の出現頻度を考察するため、前述の「災害」ではなく、「震災」と「風化させない」をキーワードで検索した。

グラフ2：「震災」と「風化させない」を条件で検索した記事数（1995-2014年）

朝日新聞		読売新聞	
1995-2010年	2011-2014年	1995-2010年	2011-2014年
65件	68件	83件	87件

第二に、「願望」だけではなく、「風化させない」ための具体的方策（「震災遺構保存」問題など）についても言及されている。「風化」という言葉の変遷を考察対象とするため、以下の枠組みで分類しようとする。①教訓のまとめ（避難訓練、研究会など）、②災害の伝承（記憶、歴史、体験など）、③防災計画・政策の改善、復旧状況・対策、心理復旧などの手段、④記念碑、遺構などの実物（観光スポットなど）、⑤（メディア、出版、地方などの）祭り、記念活動、⑥教育活動、⑦調査、インタビューによる風化の印象（個人、政府従業者、ボランティア、学者など）、⑧他（落語、出版物、時評など）。（データ表を省略）

阪神・淡路大震災以降、「風化」に言及した場合は、従来の災害から教訓を吸収し後世に伝承するために、①教訓のまとめ及び③各種の政策作成と復旧状況などについての報道は震災の直後に多く報道されたが、それに対し、東日本大震災以降は①教訓と③現状・政策などの内容が少なくなり、④記念碑・記念地などの実物の保存、継承についての報道と⑤各種の記念活動についての内容と⑦個人・学者・ボランティアが語る「風化」についての記事は明らかに増加している。⁶

(3) 社説から見る「風化」に関する災害意識の変化

災害意識の変化は、「風化」に関する社説から推定してある程度に知ることができるかもしれない。

社説によれば、阪神淡路大震災以前の自然災害に関する「風化」は防災意識に関わり、防災政策・法律などの作成の重要性を強調することが多かった。阪神以降は、防災の日に避難訓練などを行うだけではなく、普段の行動を通じて震災の記憶と教訓を日常生活の教養、能力として活かし続けるという考えに言及し始めた⁷。防災は行政の責任だけではなく、一人一人の個人的な責務でもあるという意識がメディアの言説から推測できる。この時期、「記憶を風化させない」という表現がよく見られたが、この災害を国民の記憶とすることで、次の害を防ぐことを強調したものがほとんどである。東日本大震災以降、同じく「記憶・教訓を風化させない」が言われ、次世代に語り継ぐという明確な目的により、遺構保存、慰霊行事、経験の語り部などの工夫や手段で実現できることが明確に表現された⁸。

本研究で解明したいマス・メディアの災害記憶の維持・喚起という機能は、単にメディアの自己意識だけではなく、技術革新によって記憶の保存が容易になるとともに、時代の要請に合致していると考えられる。

阪神淡路大震災以降と比べ、東日本大震災以降の行政計画も災害に関する記憶を次世代に残そうという積極的な姿勢が見られる。今井信雄は震災を記憶し伝える行為についての研究の中で、行政および研究者が積極的に記憶保存（遺構、遺跡など）の方向性を進めていることを明らかにした。国土交通省のまとめでは、東日本大震災で被災した多くの自治体で、震災の記憶や教訓を伝えるための「震災記念施設」を復興計画の中に含めている。阪神淡路大震災で被災した自治体の復興計画では、このような施設が復興計画では、このような施設が復興計画の中に含まれることはほとんどなく、わずかに、神戸市の復興計画の中に「国際公募によるモニュメントの設置」という項目のみであった。慰霊碑や記念碑などを各自自治体が設置することは珍しくないが、それが「復興計画」の中の軸として位置づけられているのは、阪神淡路大震災と大きく違う事であった。（今井、2013）

四、終わりに

「風化」という言葉は、戦後、戦争体験の継承・維持を契機に意味転用がなされ、伊勢湾台風30周年から自然災害と繋がりが、阪神・淡路大震災以降、広く使用されるようになった。しかも、阪神・淡路大震災以降、震災記憶の「風化」を意識したメディアは、「風化させない」という意識を積極的に表現した。さらに東日本大震災においては、直後からその体験を「風化させない」ことを訴えている。この間の「風化」の用法の変化は、「風化」する被災体験の記憶の維持についての、メディアによる積極的な関与への姿勢の変化と考えられる。

今後の課題としての、災害文化におけるマス・メディアの記憶構築と継承という役割を検証したいので、新聞記事だけではなく、他メディアを対象として再検討を行うようにする。

参考文献

- 1) 朝日新聞記事データベース「開蔵Ⅱビジュアル」<http://database.asahi.com/library2/>
- 2) ヨミダス歴史館<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>
- 3) 廣井脩（1982）：「1982年浦河沖地震について」『1982年浦河沖地震と住民の対応』東京大学新聞研究所。
- 4) 今井信雄（2013）：「震災を忘れてるのは誰かー被災遺物の保存の社会学」『フォーラム現代社会学』第12号、P98-103。

- 5) 廣井脩編著 (2004)：『災害情報と社会心理』第五章「災害とマス・メディア」北樹出版。
- 6) 黒田勇 (2014)：「口蹄疫報道と「災害文化」の醸成」『地域社会と情報環境の変容』関西大学出版部。

文末脚注

1 ①一般指隱晦的社会公德和旧习俗，往往涉及性话题。例えば：这种做法有伤风化。②化学名词中的风化是指在室温和干燥空气里，结晶水合物失去结晶水的现象等等。(①風俗関連営業に関する性的話題に使用 ②化学的・物理的風化作用による破壊過程)

2 日本における「災害文化」は廣井脩が1982年に初めて指摘した。

3 本研究の対象——自然災害が「風化」と繋がる用法は平成以前の新聞紙に見られていなかった。「防災の日」が成立した後、災害に関する朝日の社説(平成以前)によれば、災害については現在の定義とはほぼ同じく、自然災害という共通概念が認められる。社説が言及した「災害」は台風、冷害、土石流災害などの自然災害のジャンルにこだわられている。平成以前、災害に対して、マス・メディアと世間ほとんどどんな態度を取ったのであろうか。朝日新聞の平成以前の災害に関する社説を一部抽出し、その内容に基づいて確認しようとする。要するに、1990年代以前災害意識はまず「人命保全」という前提で、1960、70年代の注目点は災害対策・復旧における経費問題、救助法の成立、行政責任体制の作成などの行政面と防災・避難知恵の蓄積などについて、それ以降の1980年代は地震への予知・予測制度などの防災研究面が主流になる検討が多くなった。「防災」をある種の文化として継承する意識は80年代末から芽生えの可能性があると感じられたが、1995年阪神淡路大震災以前に、このような文化面から防災を検討する考え方は少なかった。例えば：「…このように、防災は当たり前のことの積み重ねだ。これを親から子へ、隣から隣へと広げていって「防災文化」を築けば、忘れたところにやられることは、なくなるだろう。(1988.8.31朝日「災害対策はつねに先手で(社説)」)」という。

4 自然災害における初めての記事例(朝日新聞)

1989.9.23 伊勢湾台風から30年 東海地方、語り継ぐ催しさまざま(列島縦横)(一部の抜き出し)

東海地方を中心に5000余の犠牲者を出した伊勢湾台風から、今年で30年。孤児たちも、いまや自分たちが亡くなった両親と同じ年ごろの父や母になった。2メートルを超す海水に浸った海拔ゼロメートル地帯には高層住宅が立ち並び、大惨事は一見“風化”しつつあるようにも見える。そのため、30年の「節目」の今年、「あの悲劇を二度と繰り返さないように」と、地元では台風を語り継ぐさまざまな催しが盛んだ。

5 1995.6.3「防災都市は他人まかせではできない 吉川仁(論壇)」(朝日新聞の一部の抜き出し)

6 「震災遺構保存」問題などについての記事例(朝日新聞)

2012.9.13(天声人語) 奇跡の一本松の保存(一部の抜き出し)

▼岩手県陸前高田市の奇跡の一本松も「切り倒す」では申し訳ない。大震災の津波に耐えて、被災した人を励ましつつ枯死した孤高の松である。きのう、保存加工のために寝かされて、しばし姿を消した。多くの人が最後を見守り、手を合わせる姿もあった▼倒れた仲間の松7万本も、心ある人たちの手で色々姿を変えている。一部だが、仏像になり、表札になり、バイオリンに生まれ変わった。柱時計となって時を刻み始めたものもある▼一本松は来年2月、「記念樹」として再び元の地に立つ予定という。もはや木の生命はない。だが人々の心に張った根から枝を伸ばして、ふるさとの復興を照らすことだろう▼切って「剥製(はくせい)」のようにしていいの。費用が高すぎる。そんな迷いや賛否もあったと聞く。だが仮設住まいのご高齢の本紙に「あれはまぎれもなく希望の一本松だ」と語っていた。筆者は部外の徒ながら、その言を支持したい。風化にあらがう意志の象徴でもある。

2014.3.10(「科学の扉」) 災害の風化 被災後15年・薄れる教訓(一部の抜き出し)

■記憶伝える工夫

災害の教訓の継承は、石碑の建立、毎年の慰霊行事、経験を語り継ぐ物語や歌などの工夫がされてきた。東日本大震災後も、災害遺構の保存が検討されている。一方で「思い出したくない」という被災者の感情にも配慮が必要だ。ただ、そうした思いは時間の経過とともに変わっていく可能性もある。

災害の記憶の忘却は、仏教での法事のように、よい意味での区切りにもなり、苦悩した被災者が別の見方や考え方ができるようになる。矢守さんは「時間の経過は単なる記憶の風化ではなく熟成を生み出す。時を経たからこそ見えてくる事実や知識、課題があり、将来につながる」という。個人の記憶は薄れても、災害の教訓を社会に刻みつけるために丁寧な熟成が必要だ。(編集委員・黒沢大陸)

7 1999.9.1「走り続けること 防災の日」(朝日新聞)

「防災の日」に思い出したように訓練するだけでなく、ふだんからの地道な歩みこそが、震災の記憶と教訓を私たちの胸にいかしつづける

のではない。

8 2013. 3. 13 「震災遺構の保存 記憶の伝承に生かせるのなら」(読売新聞)

被災の記憶を風化させないために、遺構を保存すべきだという意見も根強い。遺族の中には当初、解体を求めながら、時間が経過する中で「悲劇を繰り返さないためにも保存することが必要だ」と考え直した人もいる。遺構の保存の是非について、記憶の伝承、防災、慰霊、将来の街づくりなど、様々な角度から地域で議論を尽くすべきである。…